

# 生存科学研究ニュース

Vol. 34, No.2

2019.7 発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp http://seizon.umin.jp

## 地球環境と生存

理事長 青木 清

このたび、役員改選にあたり当財団の理事長に再任されました。生存科学研究所の発展に力を尽くす所存でございます。

さて、当財団は永年日本医師会会長を務めた故武見太郎先生により 1984 年に設立され、

2012 年に公益財団法人となり、本年、創立 35 年を迎えました。

財団の理念とこれまでの実績を大切にしながら、当研究所の理念である「生存の理法」を確立するとともに、社会貢献への取り組みを推進、展開してゆきたいと考えています。皆様方の力強いご支援とご協力を引き続きよろしくお願いいたします。

2020 年のオリンピック開催まであと 1 年となりました。本年のような春から梅雨期そして夏への天候の状況を体験すると、まず心配になるのは来年の春から夏、特に 8 月の気象状況です。このところ毎年のように夏の季節を迎える時期になると、豪雨や台風の被害が日本全域に広がるようになりました。今や日本のどの地域に住んでいても災害の心配をしなければならなくなっています。この数年にわたる不安定な気象変動では、その対応について国民は今後どうしたらよいかの大きな課題です。地震による災害はもちろんですが、自然災害の対策として、気象庁からの早い予想と避難勧告の発表もその一つかもしれません。しかし、それは国民の不安解消につながらないといつてよいでしょう。



本公益財団創始者の故武見太郎先生は、本年のような気象変動が発生することを、おおよそ 40 年前すでに心配し、それは産業や経済第一主義の社会が、地球の環境問題を無視して人間の生存を守ることを忘れていたからだと言っていました。さらにご自身の理念である「生存の理法」として挙げていたのは、「人間の生存を守るために、日本のみならず人間が生存している諸外国で、地球環境の保全について、倫理に基づいて科学技術の面からの方策を考えることである」でした。第二次世界大戦後の高度発展の時代において先進国は石炭、石油の乱用によって公害をもたらしましたが、それは経済優先の結果であり、そのような地球環境では、いかに医学・医療が進歩しても人間の生存の危機を招くのではないかということでした。人間の生存を守るためには国民は、政府は、また世界の各国はどのような方策を立てたらよいか、地球環境問題を世界規模で考える必要性を語っていました。

今日、21 世紀に入ってから科学技術の進歩は著しいものがありますが、本当に地球環境改善に役立っているのは何かというと、明確な答えのないのが現状です。地球上の環境問題は、すべての生物の生存を守るために、すなわち地球規模でのヒトを含めた生物世界の生態を世界の国々がどのように守っていったらよいかということですが、現在のところ、これという答えが求められない状況ですが、日本はオリンピック開催など大きな行事を迎えるにあたって、世界に地球環境保全を提唱する良い機会ではないでしょうか。当生存科学研究所は小規模な公益財団ですが、「生存の理法」を理念として地球環境改善のための方策や人間の健康維持のための活動をさらに進める所存です。

令和初の植樹祭 一生存科学研究所助成事業—  
森の防潮堤協会 園田 義明

岩沼市で初めての植樹祭が行われたのは、東日本大震災から約1年が過ぎた2012年5月26日のこと。この時はまだ実証実験の位置付けでした。

そして、記念すべき第1回目の千年希望の丘植樹祭が2013年6月9日に行われ、森の防潮堤の提唱者である植物生態学者の宮脇昭先生指導のもと、約4500人のボランティアの皆様が集い、約30000本の苗木を植樹しました。

以後、公益財団法人生存科学研究所をはじめとした多くの方々からのご支援を得ながら、毎年一度の大規模な植樹祭を行い、岩沼市沿岸約10キロに及ぶ森の防潮堤の完成を目指してきました。

令和初の植樹祭は5月25日(土)に開催し、約1300人のボランティアの皆様が36種類約12000本の苗木を植樹しました。この植樹祭は平成25年から数えて第7回目になります。

この日は収穫祭も同時に行い、植栽地林縁中心に植えてきたハマナスのローズヒップを漬け込んだ飲む酢を使ったハマナスソーダで収穫を祝いました。ハマナスは皇后陛下雅子さまの「お印」であることから、令和時代の幕開けにふさわしいイベントになりました。(開会式)



さらに植樹祭当日の地元紙「河北新報」の朝刊紙面に、千年希望の丘が2020年東京五輪の聖火リレールートに内定したとの記事が掲載されました。

これまで4万人近いボランティアの皆様がこの地に集まり、植えた苗木の数は30万本を突破。参加者の鎮魂の想いや未来への希望を託された木々の中を聖火リレーが駆け抜けることとなります。

2020年春の植樹祭がいよいよファイナル。その準備に加え、聖火リレーのおもてなしをどうするのか。岩沼市関係者との話合いの日々が続いています。

高齢者と対話ロボットのコミュニケーションに関する量的・質的調査研究  
研究責任者 高木 美也子

2019年6月13日に本年度第1回目の研究会が参加者15名のもと、東京通信大学で開催され、土屋陽

介(東京通信大学講師)による「人とロボットのインタラクション」というテーマで講演が行われた。経済産業省が発表した「ロボット産業の市場動向」では、ロボットの市場は大幅に拡大していくと予測しているなか、市場拡大を支える技術としてのプラットフォームとはどういったものであるべきか。実際にIoTデバイスを使った洪水検知システム(インタラクションプロジェクト)を行ったブルネイの共同プロジェクトを事例に相互にどう影響を及ぼしてきたか。また、その後の単独になってから現在までの研究の成果について紹介があった。



後半は、人との共生を目指すパートナーロボットとは、「人とロボットがコミュニケーションを行う上で仕草や顔の表情などの非言語のインタラクションを行うことで、ロボットが人のパートナーとして生活の一部となっていく」ことが期待されるとして、実際にプロトタイプとして制作された足の動作に着目したロボットを動かしながら、ロボットはどういった役割で我々の生活の中に入ってくれば、人とロボットの間が一方通行にならず相互作用できるかという議論が活発に行われた。今後の研究の軸であるロボットを取り巻く環境、事例、パートナーロボットとしての役割などについても幅広く討議された。また、それぞれのロボットにおいてはまだ検証が不十分であるが、展示会等でのデモ展示において概ね肯定的な意見が挙げられているので、引き続き研究開発を行い、検証を行っていく。今後、これらの議論を踏まえて高齢者(人)および対話ロボット(ロボット)についての見識を深め研究に取り組んでいきたい、ということであった。

「森・その地域社会、生活文化、  
精神世界における役割の再生的研究」会  
研究責任者 藤原 成一

2019年(2年度目)第1回研究会を、7月5日、生存科学研究所で開催した。はじめに問題提起として「森のオントロジー」の標題で藤原が発表。全ての存在・事象・現象を人間の位置から捉え、人間にとってどう意味があるかと判断し評価する、そういう「意味



偏重空気」が現代を覆う。人間本位の姿勢は地球環境、地域生態の考察にも浸透し、森を見るのも、人間生存を守るものとしての「環境」と人間に役立つものとしての「資源」の2つの機能からのアプローチがもたらされた。

森に寄生しつつ森を人間の都合で解釈し利用し改造する、そういう姿勢で森は意味づけられてきた。しかし、意味はあくまで人間の存念でつくる虚構で、人間本位を超えたところに次元を異にする意味世界、多義的なあまりに意味を超えた超意味世界があるのではないか。森を人間尺度を超えた多義そのものの超意味の存在と受けとめ、人間本位の意味世界から解放する思考を提唱。森を①「環境」や「資源」など人間が利活用する有意味な存在、②接する者によって様相を変える多義性そのもののカオス的な超意味の存在と捉え、意味／超意味の相反的存在として見直すのである。それによって人間による意味づけを脱した森本来の野生が見え、また人間が失った野性に気づき、そこから利害を超えた森との関係が自覚され、共生が根づくとした。

意味ばかりを追う現代にあって、多義多様な意味を持つ森は現代の都市文明に対するしぶとい反措定であり、意味偏重の現代へのケアフィールドである。科学技術をはじめ一義的意味に躊躇しているとき、一義的から多義的へ、秩序からカオスへ、剪定された文明から野生の原野へと、森はひととき人間や社会や地球環境を解放してくれる。それを感得しうるのが意味偏重空気に食傷した人間であり、そこに森との新しい共生関係が共創される。森は現代文明の非人間的症状の治癒者であり、人間本位という中毒症の解毒者である。人工的世俗の意味体制にあって、なお非日常的超意味時空と触れ合うとき、人間も意味から解放され、超意味無意味の三昧境にあそぶことができる、と偏狭な意味世界を超える方途に思いを巡らせた。

つづいて、研究会メンバーが各々取り組むテーマの概要説明を行った(50音順、仮題)。小林芳子(生存研常務理



(西表島、古見の請原御嶽の森)

事)さんは「宮脇昭の森づくりの思想と方法」で宮脇先生の先駆的な着眼と研究・実践の跡を紹介、清水美香(京都大学)さんは「逆境に遭っても、折れずに、しなやかに回復する力、変化し、発展する力」であるレジリエンスこそ、いま見直しと回復を迫られている森と向き合う力であるとして、コモンズとして

の森の再生・新生を課題とする。高田勝(進化生物研究所)さんは「森の野鷄から庭の家鷄へ」と題して、野生から家畜化の生態を追い、ヤンバルの森の中での研究観察から野生の意味を追究する。等々力英美(琉球大学地域連携推進機構)さんは「沖縄の森と人」との関わりを生態学的側面、政策面、生活慣行面、宗教祭祀面、さらに米軍基地の面など、多様な側面から考察、森と海のつくる沖縄像の再構築をめざす。日置道隆(金剛山輪王寺住職)さんは宮脇先生と共に先頭に立って推進してきた「いのちを守る森の防潮堤」と自坊の森づくり、さらに「千年希望の丘づくり」という壮大な運動の指導的先導者の立場から、地域文化と宗教文化のシンボルとしての共生の森づくりの実践の哲学を提起する。真鍋和子(児童文学作家)さんは「ヤンバルクイナはなぜ生き延びることができたのかーヤンバル・森のふしぎといのちの輝きを探るー」と題して、ヤンバルクイナの発見から研究・保護への先人達の運動を追跡し、いのちを守るヤンバルの森を再照射する。そして丸井英二(人間総合科学大学)さんは、人間と森との関係を環境科学や衛生学、医科学の立場からではなく、野生との共生、異質なものと共存という基本的地盤からの思索を通して、森とのつき合いのあるべき姿勢を省察する。

以上のとおり、メンバーから新鮮な抱負が語られ、各々に和気あふれる談論が続いた。そして2回目の研究会を仙台での森づくり現場観察を予定して閉会した。

EBOOK・健康価値創造研究 発刊に向けて

研究代表者 森本 兼曩

生命は絶対的な存在意義を持っていますが、健康は生命の実体であり、人間生活活動の源泉として、意味深い普遍的価値を持っています。

生存科学研究所自主研究として2015年度に発足した健康価値創造研究会では、貨幣経済価値を超えて、より人間的な健康価値を創造していく多様な活動・施策を国の政策中枢に、また、国民のライフスタイルの核に据えていくと共に、それらを統括していく機関＝Japan-CDC創設を構想しています。さらに、包括的なNational Health Index (NHI)を設計して、身体力、精神性、環境刺激応答、社会政策、美と芸術、伝統と地域文化、東洋性や宗教性など、多次元構造の美しい健康像を「見える化」して、斬新な健康増進と予防医学実践体系を組み立てようとしています(生存科学誌 Vol.27-2. 209-221,2017 参照)。

これまで4年余の間、19回の研究会を開催して、38の講演討議を主催してきましたが、更に、生存科学

研究所ホームページに「EBOOK・健康価値創造研究」のセクションを新設して研究会での講演活動を広く社会に発信敷衍をしていく事業を進めております。

このたび、研究会活動第二期にあたる第16回研究会以降の講演から、体裁の整った4論文を第一部(PART-ONE)として発行する運びとなりました。

まず、健康価値を決定する主要主題「食健康行動学」として3編です。

健康寿命延伸への取組み「メタボ・フレイル」阿部圭一(国立健康・栄養研究所所長)、地域コホート「高山スタディ」の成果「そして子どものライフスタイルと健康課題への展開」永田知里(岐阜大学大学院医学系研究科疫学予防医学教授)、病気になる生活「どういう食生活が健康をもたらすか」渡邊昌(生命科学振興会名誉理事長)。そして、世界の健康福祉国家建設のリーダーたる英国が歩んできた道・解題の一編です。英国のHealth & Well-being 社会建設「500年の社会実験、その意味するもの」高鳥毛敏雄(関西大学社会安全学部社会安全研究科教授)。

EBOOK・第二部として、更に4論文を年度内に発行の予定で準備を進めています。

「EBOOK・健康価値創造研究」の編集発行作業は、編集主幹・森本兼曩(研究代表・産業医学研究財団常務理事)と、編集局・和田裕雄(順天堂大学准教授)、澤田晋一(東京福祉大学教授)が担当します。

掲載論文原稿への概括的コメントなどを依頼する編集顧問には、稲葉裕(救世軍清瀬病院院長)、上田厚(東アジア HPNC 理事長)、中路重之(弘前大学特任教授)、吉村健清(産業医科大学名誉教授)、今中雄一(京都大学教授)、佐々木敏(東京大学教授)、森千里(千葉大学教授)、他の先生方にご協力をお願いしております。編集スタッフは、試行錯誤を繰り返しながらの編集作業になりますが、よろしくご指導をお願いいたします。

### 医療・福祉・教育におけるサービス利用者側の モラル意識と葛藤の実際 研究責任者 采女 智津江

2019年6月9日(日)13:00~14:20にSkypeにて第1回自主研究会を開催した。

本研究会としての最初の顔合わせでもあり、各自の簡単な自己紹介の後、采女が先月に開催された責任者打ち合わせ会の状況を報告し、研究の遂行にあたっては、倫理面での不正が無いように十分留意することを確認した。

その後、本年度の目標とスケジュールを共有した。本研究班は、2016年度から2018年度に遂行した

研究課題「対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造」(生存科学研究所自主研究課題)の成果を踏まえ、支援者側ではなく、支援の対象者側の倫理観を探索的に明確化し、一定の成果を得ることを目標とする。具体的には、支援者側のアウトリーチだけでは解決困難な問題解決の手がかりを得ることを視野に入れ、医療・福祉・教育の各領域で、例えば、積極的に支援を求める当事者と求められない(求めない)当事者間のモラル意識や価値観、葛藤の対象について実証的に探究する。

本年度は、2年目(2020年度)に量的調査(インターネット調査を予定)を行うための予備調査期間と位置づけ、井上、朴峠、北川、小田桐は、班全体の研究テーマに沿った各自の問題意識に従って質的調査を実施、采女、門田、吉田がそれらの研究を支援、統括する。予備調査結果を学術集会等で公開する場合、倫理審査申請が必要となるため、その手続きが必要となる。

### 学術誌「生存科学」への寄稿・投稿のお誘い

「生存科学」誌では研究論文のほか、研究ノートや研究会報告、研究会構想などの原稿を受付けています。また毎号、特集に関する論文、提言や論評の投稿を待っております。原稿締切は5月末と12月中旬の年2回です。(次号特集は「バイオポリテックス」で締切は、12月中旬です。)ご投稿の際には「投稿規定」(「生存科学」誌巻末、あるいは生存科学研究所ホームページ<http://seizon.umin.jp/publication/toukoukitei.pdf>)をご参照ください。原稿の種類(論文、研究ノート、研究会報告、特集など)をご提示ください。

### 【生存科学叢書】(日本評論社)新刊2冊

『子どもの未来をひらくエンパワメント科学』

(安梅勅江 編著、定価2,400円)

『資本主義はどこに向かうのか』

(堀内勉、小泉英明 編著、定価2,800円)

子どもの問題が山積しているなか、先端科学の成果をもとに、個々の課題解決の道を示すパワフルな「子どもの未来学」。政治経済体制、社会システムの重層化、科学技術社会の先鋭化につれて資本主義も変容を迫られています。多彩な論者による「資本主義の近未来像」。ともに先端の成果が躍動する力作です。

(会員の方は定価です。)

申込みは生存科学研究所事務局へ)

